

---

# 自分でもビックリ！

ガム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自分でビックリ！

### 【Zコード】

Z0612A

### 【作者名】

ガム

### 【あらすじ】

北條学園に通う一年生、虎神アキラはある日夢で不思議な出来事が起くる・・・その時アキラの周りでは続々と異変がおきよつとしていた・・・

## プロローグ

北條学園高等部一年生

「虎神アキラ」

は不思議な夢を見ていた。

夢の中でアキラの視界にはなにも見えずただ白い霧が広がっている。

「なんだココは・・・」

夢だとはハッキリ認識しているがどうも妙な感じがする。虎神アキラよ・・・

「だれだ！」

謎の声が頭の中で響いたかと思つと田の前に見たこともない格好の人間が立っていた。

その姿は赤い甲殻で全身を覆われていて獸の様な感じだ。まるで特撮のヒーローみたいに。

「まあ、そう驚くな

「な、何者だアンタ・・?」

「私はレッド」

「レッド?」

「そうだ、だが今はそんなことはどうでもいい。簡潔に要件を言わせてもらひ。お前のその高潔な魂が闇の住人や魑魅魍魎、悪魔どもに狙われているんだ」

「俺が狙われている?」

「そうだ、そこでお前には特別な力を与える。本来なら我々が守る

べきだが生憎そんな暇はないんでな・・・

突然現れた異人にワケのわからない事を言われアキラは多少腹が立つていた。

「あんまし変な事言うなよ！悪魔や魑魅魍魎？いるワケねーだろ！」

「そのうち嫌でも信じることになる・・・」

異人が軽く微笑んだかと思つとその瞬間体から光が飛び出してアキラの右腕を直撃した。

光は形を作り、ブレスレット状に変化した。

「げ！なんだこりや？」

「それを付けていればいつでも変身できる筈だ。だが忘れるな、その力は元々ヒーローに与えられる力。人に正体がばれたり、変身している所を見られると一度と力を引き出せなくなるぞ」

「・・・・・」

変な夢だな、俺疲れてるのかなと思いつつアキラの意識は段々と薄れていった。

「いいか闇の住人や惡魔などは魂を食つて成長する。その高潔な魂、絶対に奴らに渡すなよ・・・・・自分の身は自分で守れ・・・」  
レッドと名乗る異人は霧の様に消え再びアキラは一人になった。静寂のなかでつぶやいた

「全然わからねえ・・・だけど・・・なにかが起きる気がする・・・」

「 その言葉いい残しアキラの意識は完全に消えた。

## プロローグ（後書き）

なんかもう書けないかも……………

## 浴室でびっくり

朝・・・爽やかな日差しがカーテンのスキマから差し込んでいました。

「眠・・・」

アキラはいかにも面倒くさいといった様子で顔だけを動かし時計を見た。

時刻は午前6時を数分過ぎている。

「まだこんな時間か・・・」

気がつくと寝間着が汗でビショビショになっている。

アキラが珍しく早く起きてしまった原因是これだった。

「すげー汗だな・・・変な夢見ちまつたからな」と、アキラは何気なく自分の右腕を見た

「っええ！？」

声にならない声が部屋に響いた。

無理もない、驚くべき事に腕には夢で見た腕輪がしつかりとはまっていたのだ

「ただの夢じゃなかつたのかつ・・・！」

数秒の沈黙のあとアキラは夢での出来事を思い出した。

悪魔や闇の住人に魂を狙われてる事、腕輪から力を引き出せる事、そしてレッドと名乗る異人のこと・・・不思議と記憶に残つていた

「信じられない夢だ・・・まあどうでもいいか」

などと他人事の様に言いながらアキラは風呂場に向かつた。

今はとりあえず汗のベトベトと微妙な気分をシャワーでスッキリさせたかったのだ浴室に行きソッコーで服を脱ぎ湯浴みをしていたアキラはふと思つた

「邪魔だなあこの腕輪・・・」

確かにシャワーを浴びているとき腕輪を付けているのは邪魔だ

「はずしちまうか」

ガチャガチャガチャと腕輪を外そうとする

「外さない方がいいと思つわよお」

「・・・」

どこからか声が聞こえてくる

「・・・・今女の声が聞こえてきたような・・・」

辺りを見回すが誰もいない。フロ場だから当たり前なのだが。

「なんだ気のせいか・・・・・・ビックリしたな」

「気のせいじゃないわよバカ！」

「！？バカだと」

今度は確実に声が聞こえてきた、しかも腕輪からだ。

アキラは驚いて腕輪を見る、すると腕輪からなにかが飛び出ってきた。

「うわっ！」

驚いて声を上げたアキラはよ一く眼を凝らして腕輪から突然出でたモノを凝視した。

「・・女・・？・」

なんと腕輪から女の子が出てきたのだ。

しかもこれが超かわいい。

おもわず触りたくなる様なキレイな肌と髪、整った顔と印象的な大きくて青い眼、バランスのとれた体に似合う大きな胸。

男だったら絶対彼女にしたいっていう様な美少女だった。

しかし残念なことがあった。

肉体のサイズが20センチもない。

体のサイズが人形ほどしかないのだ。

さらに背中から羽の様なモノが生えていてフワフワと浮いている。  
ど一見たってただの人間じゃない。

幻でもない。

もしかしたらレッドの言つていた悪魔かもしれない。

アキラは自分の事をバカ呼ばわりした美少女を警戒して睨む

「俺の魂を狙いにきた悪魔か？」

美少女はため息を吐きながら喋りかけてきた。

「私をなんだと思ってるの？こんな美少女が悪魔のワケないでしょ

！」

自分で美少女と言つてるのは置いといて、よく考えたら腕輪から出てきたのだ。敵ではなさそうだ

「じゃあ何者なんだよ。俺はお前みたいな生物見たことないぞ」

「お前じゃないわよ！私は精霊のリース！レッドから聞いたでしょ

！」

「精霊のリース？全然しらないぞ」

「その間抜けな顔・・本当に私の事聞いてないみたいね。」

「・・・それでなんの用だよ精霊さん」

アキラは少し声を低くして尋ねた。

バカとか間抜けとか言われて多少カチンきてるようだ

「私はアンタのお目付け役になるようにレッドに頼まれたのよ。腕輪だけあっても一人じゃすぐ殺されるだらうからって」

「ふーんお目付け役ね。どうでもいいから出でつてくれないか」

アキラはシャワーを浴びていたので裸だ。

例え人間じゃなくても女の子に裸を見られるのはやっぱり恥ずかしいのだ。

アキラの言葉などまったく無視してリースが声を上げる

「そろいえばアンタ、腕輪を外したらダメよ。いつ悪魔や魑魅魍魎

に襲われるかわからないんだから！それがないと変身できないのよ！」

それを言つたために腕輪から出でたらしく。さすがお田付け役だ  
「分かつた分かつた腕輪は外さないって。だからビロードに行つてくれ。こつちは裸なんだぞ」

それを聞いたリースは妖艶な笑みをうかべる

「恥ずかしがらなくていいわよお別に」。じばらくは一緒に生活する  
んだから」

と笑顔で言つてきたリースにアキラは質問する  
「じばらくしてどれくらうだよ」

「まあアンタが一人前になるまでかな……。それまでよろしく  
ね」

チユ 挨拶がわりみたいにリースがアキラの頬にキスをしてきた。  
ちょっと嬉しいが多少不安がよぎる。

リースが田の前に現れてきた時点で逃れられない運命のパズルの一  
部になってしまった気がしたからだ、今起きている事は夢でも妄想  
でもない現実なんだと言われようがった。

アキラが少し照れながら口を開ける

「なあ、俺の魂つてそんなにすごいのか？悪魔共が狙つてんだろ？」

「相當にね。いろんな奴らに狙はれてるのは確かだよ」

「やつぱりそつか……。そんな危険があるならなんでレッドは  
もつとましな精靈をよこしてくれないんだ？もつと頭の良さそうな  
奴がよかつたな」

アキラが少し嫌みの入つた言葉を投げかける。

するとリースが少し涙ぐんだ田でこぢらを睨んできた。

「・・・どーゆー意味よお！」

(やつぱりバカそだなコイツ。

自分の事美少女とか言つてたもんな。  
それとも精霊つてみんなこうなのかな? )

この後言葉の格闘が多少続いたのは言つまでもない . . . . .

結局アキラはあまりスッキリする事ができなかつたができなかつた

## 浴室でびっくり（後書き）

なんか会話が成り立つてない気がする・・・コツがあつたら教えて下さいお願いします

## 学校でびっくり！

「んバイクが迷惑な音をたてながら猛スピードで走行している。」

ヘルメットもつけずにこんな速度を出していいのだろうか乗っているのは北條学園の制服を身に附けている虎神アキラだつた。せっかく早起きしたのにリースとの口論のせいでいつの間にか学校の登校時間に間に合わなくなっていたのだ。

「なあ、リース」

「なあに？」

リースが服の内側から顔をだしてくる。

「調からして朝の事は全然気にしてないようだ。」

「論のせいで遅刻確定のアキラもあまり気にしてないらしい。遅刻はアキラにとって珍しい事ではないからだ。」

猛スピードをだすのは風が気持ち良いかららしい。

「お前さ、腕輪の中に入れんだろ。そろそろ中に入つとけよ」

「なんであ？」「

「もうすぐ学校だからだよ。他のヤツらに姿見られたら面倒なことになりそつだからな・・・」

確かにリースみたいな生物が学校中を飛び回つたら大スクープになつてしまつ。

しかもカワイイ姿をしてるのだ、マニアな男に捕まつたら一生監禁されるかもしねり。

「大丈夫だよ、力のない人間には私の姿見えないんだからあ」

「いいから入つてろ」

「それじゃつまんないよ～」

普通の人に姿を見られないのはいいがリースと喋ってる所を第三者に見られたらおかしい人だと思われる。

こいつ独り言で何言つてんだとか思われてします。

などと話している間に校門の前にいた。

アキラが通っている北條学園は小中高大まであるかなりでかい学校だ。

ガシャン。

学校の駐輪場にバイクを止めたアキラはゆっくりと高等部の校舎に向かっていく。

げた箱で靴を履き変えて二階にあるじぶんのクラスの2 Aの教室のドアを開けたガラガラガラガラ・・・今は数学の時間らしかったが生徒達の目線がアキラに注がれる

「おいアキラ！また遅刻かよ」

アキラの友人の佐倉大介がからかってきた。

教師が不愉快そうな顔しているがそれを無視して自分の席に座る。だが隣の席にも不快そうな顔をして睨んでくる人物がいる。

生徒会長の有栖川真衣だ北條学園はかなり有名な学園で偏差値も高めの、いわゆるちょっとしたエリート学校なのだ。

そんな学校に毎日遅刻をして、テストの点数も低いアキラが未だに在学しているのが相当気に入らないらしいまあいつものことだが・・・

・

「・・・そんなにいたじるくなよな・・・・」

アキラが誰にも聞こえないような小声でぼそっと言つたのが聞こえたらしい。

ものすごく怒氣が伝わってくるキーンコーンカーンコーンその時ちよつと授業の終わりを告げるチャイムがうるさく鳴り響いた教師がもうすぐテストだからなど言いながら退出し、一気に生徒達が騒がしくなる。

この席に座つてゐるといつものよつと有栖川が説教じみた事を言つてくる。

アキラは素早く席を立とつとしたがガシツと腕を掴まれた

「待ちなさい、虎神アキラ」

「…なんだよ」

「あなたまた遅刻して・・・やる気ないならさつと学校やめなさいよ！」

いきなりキツイ言葉だがまあいつも言われているのでアキラはあまり気にしないでいる

「あのなあ・・・なんでお前にそんなこと言われなきゃいかないんだよ・・・」

「私はこの学校の生徒会長よ、言つて当然でしょ。だいたいあなたみたいな成績悪くて遅刻して問題ばっかり起こしてゐる生徒がいまだに退学されないなんて奇跡よ奇跡。これじゃあこの学園の株も下がつちやうわよ」

有栖川真衣は有栖川財閥の令嬢でびっくりするほどプライドが高い。

まあ頭が良くて、なんでも得意でしかも美人じや仕方がない。しかしホントに言いたい放題だな。

「分かつた分かつた・・・・・分かつたから説教はやめてくれ」

このままでは貴重な休み時間が潰れてしまつため適当に話しを終わらせたいアキラは謝るフリをした。

「全然心がこもつてないじゃない」

と、つっこまれたがそれを無視して席を離れた

## 学校でびっくり！（後書き）

このペースだと完結までに相当かかるね

なるよひになれ

北條学園高等部棟の上空でバツサバツサと鳥が一匹飛んでいた

「ケケケケ良い香りがするぜ・・・」

一方の鳥が喋るともう片方の鳥が言い返す

「ああ確かに似そうな匂いだ・・・だが今は狩れないな」

「あ? なんでだよナブル」

ナブルと呼ばれた鳥は顔をしかめた

「わからないのかベルル.. これだけの人間がいては誰にも見つからずに狩るのは不可能だ。それによく匂いを嗅いでみろドブ臭くないか」

ベルルと言われた鳥はナイフの様に鋭い鼻をヒクヒクと振るわせた

「確かにドブ臭い精霊の匂いがしゃがる……だがなんも力の波動を  
かんじねえ」

「そいつが力を抑えてるだけかもしれない、狩るのは夜まで待つんだ」

「いいじゃねえか今やつちまおづしつー俺は・・・オレはもう腹が  
へつてガマンできねえんだよつー」

鳥は汚くよだれを垂らしながらすでに臨戦態勢に入っていた

「いいから夜まで待つんだ。あまり大事にはしたくない」

「うるせー俺に描図するんじゃねーぜ、ケケケケこのさいや下にいる  
人間全部喰つてやるーー明日のニュースは『学園、謎の大量虐殺事  
件ー』ってトコかーヒヤヤハハハアつーー」

とんでもない事を言いながらベルルと呼ばれた鳥は凄まじい早さで  
急降下していく

「アイツはまさに愚の骨頂だな……そうは思わないゼガル」  
いつの間にかナブルの後ろには黒いローブで全身を覆つた男が現れていた

「まあいいではないですか。これで上物の魂が手に入るなら良し、もし下にいる精霊とやらに殺されても邪魔な馬鹿が消えてくれてそれはそれで良しです」

「それもやうか……やういえばあいつにいつも兄貴面するなと言われたよ」

「ククク……駄目な弟を持つと大変ですね」

「全くだ」

アキラは有栖川を無視して席を立つた

その瞬間教室の窓ガラスがガシャーンと音を立てながら勢いよく飛び散った

教室が一瞬で騒がしくなるがすぐ。ガラスの破片で怪我をした者が  
入るらしく倒れ込んでいる者もいる

「！？」

「なんだなんだ！？」

「カマイタチか？」

皆何が起きたのか判らない様子で混乱しているらしい。何が起きたのか一瞬で判つたのはただ一人虎神アキラだけだった。アキラの視界にはでかい鳥のような生物がいる。だが手足があり獅子のような牙があり体長も鳥ではありえないサイズだ。

アキラ以外にはベルルの姿が見えないらしく誰一人逃げよつともしなかった

（お、おい嘘だろ…あれが悪魔！？駄目だ、怖え、俺はずつとあんな奴に襲われつづけるのかつ！？）

「おいアキラどうした？おまえやけに顔が真っ青だぞ」

佐倉大介がからかうように話かけてきたがアキラにそれを聞いてい

る余裕がなかつたのか完全に無視している。

ベルルはクラスの人間が怯えて混乱しているのを満足そうな顔でながめていた。

「ケケケケこれだけ人間がいると上物が誰かわからねえなあ。まあ全部食べばいいかケケ、まずは女から喰つてやる」

ベルルはヨダレをだらだら垂らしながら嬉そうに狙いを定めようとしている。

ベルルのセリフを聞いたアキラは背筋が凍りつきそうだった。

このままだと大量の死人が出てしまう。

しかしアキラが逃げるよつに呼びかけたところで何人の人が動いてくれるか解らない。

皆ガラスが割れた程度としか思つてないのだ。

「（おいリースどうにかしろよつ……）のままだと大変な事になつちまつぞつーおいコラ！聞いてんのかー？）」

アキラが小声でリースが居る腕輪に話かけるが全然反応がない。

「（おいどうしたんだよリース、リース…………ん？」

腕輪から微妙に音が出ている気がしたので耳を当ててみた

スースースー……

「（寝息？もしかしてコイツ寝てるのか。そいついえば校舎にはいつからヤケに静かだつたな・・・・・つてやばいぞー起きろ！バカ！）」

スースースー···

駄目だ、完璧に起きそくにない。一人でなら逃げれるかもしない、しかしそれでは確実にこの場にいる者は殺されてしまう。

「くそ！一人だけ逃げるわけにもいかないし、こうなつたら腕輪の力を使うしか···・···・···・···・···・···ってどうやって使うんだつ！？」

アキラはリースと朝いろいろな話をしたが肝心な腕輪の力を引き出す方法を教えてもらつてないのだ。

そんなことは関係ないとばかりに怪物が動き出した。一人の生徒を今にも切り裂こうと鋭い爪がついた腕を振り上げている。狙われているのは···・···・···・···・有栖川真衣だ。有栖川の容姿は悪魔を引き寄せるものらしい。当の本人は窓ガラスが割れても冷静で「誰か先生呼んでくればいいじゃない」ととか言っている。

近くで人が···・人間が殺されるであろう数秒前の光景を見て勝手に体が反応して声を上げてしまった

「有栖川！···横に飛べっつ！···」



なるべくなれ（後書き）

パソコン買ったので執筆すびーどが飛躍的に向上すると思います

## 凄くピックリッ！？

声を掛けた瞬間と同時に有栖川に全力で飛びついた。自分でも驚くほど強く飛び掛った為に2メートルは奴との距離を離せたはずだ

「ちょっとーイキナリなにすんのよーー」

何か怒っているようだが問題ない。ただ背中を強く打つだけだろう、あの爪で切り裂かれるよりは数倍ましの筈だ

「俺だつてやりたくてやつたわけじゃ・・・ゲツ」

いや・・・問題はあった。無我夢中で飛びついたからか有栖川に覆いかぶさる形になってしまっている、これはマズイ。しかも右手がちょうど胸のところを掴む様になってしまっていたのだ

「わ、悪い・・・」

お互いの顔が異様に近く有栖川の息遣いを肌で感じることができる。こんな場所ではなくベッドの上などでこの状況になれたらどんなに嬉しいか、アキラは煩惱を必死に振り払いすばやく起き上がる。乱れた呼吸を整えることに徹する。

「あ、その、・・・」

駄目だ。言葉が見つからない。呼吸も荒い。これじゃ有栖川でなくとも怒るよな・・・

「虎神アキラあー今日という今日は許さないわよっー」

有栖川が批難の口をしながらガバッと立ち上がる。ほのかに紅く火照った顔をこちらに向けて鋭く睨み付けてくる、有栖川の得意技だ。また罵倒してくるのだろう。今はそんな悠長な時間はないというのに。

だが違った。アキラを見た瞬間有栖川は凍りついたように動かなくなつた。正確にはアキラの背後、数秒前自分がいた場所を見て感情が停止した、床が砕けていた。あるのは無残な三本の爪跡とバラバラになつた椅子や机だけだつた。

「え・・うそ・・」

もしかして助けてくれたの？コイツが？何で？そんな義理なんてない、作つた覚えもない。でも助けてもらわなかつたら・・・確実に・・自分もバラバラになつっていた。

有栖川の様子が少しおかしいことに気付きアキラは後ろを振り返る。

「ーー！」

床や椅子が無残に切り裂かれていたのだ。たつた一振りでこの威力・

・・・・・体が震えだしそうだ。今考えると良く助けられたものだ  
と思つ。

「ほとんどの反則じゃねえか・・・痛つーー」

今になつて氣付いた。やはりアキラがさつきの攻撃を無傷で避けていたわけじゃなかつた。左肩から背中に掛けてズバッとやられていたのだ。だが傷 자체は浅いものらしく派手に血が出てゐるわけでもない。

「へへ・・・」

傷は浅い。でも痛いことは変わりはない。それを我慢して奴と対峙する。逃げはしない。もうばれてしまつた筈だ。今まで見えた振りをしていれば騙し通せたかもしない。でももう無理だ。有栖川を助けたことによって自分が奴にとっての極上の餌だと気づかれたはずだ。奴が言つていた、これだけ人間がいると上物のが誰か解らないと、もうそんなの関係ない。その証拠に避けられたことに驚いて嘘のように止まつっていた怪物がギラリと目を向けてくる。

「自分から身を明かすなんて粹な事しやがるぜヒヤシッヒヒヤー！  
気が変わつたゼエエー！兄貴にこんな面倒な魂半分だつてやるもんかアアー！全部俺が食らい尽くしてやるウウウゼツツーー！」

「ウルセー！鳥つーーでかいからつて粹がつてんじやねーぞー！」

と脱兎のごとく教室から抜け出る。奴の様子からしてもう俺しか視界に映つてない。ならこんな狭い教室から抜け出てもっと自分が動きやすく立ち回れる場所をさがすべきだ、そうしたほうが被害が少なくすむ。せめて何十人・・いや何人がこの異常に気付き逃げ出すまでは奴を引き付けなくてはならない。俺は死体なんか絶対に見たくない・・・。

だが怖い。だがそれ以上に腹が立つ、ムカつく！！

アキラにしてみれば街中で変態にいきなりナイフで切りつけられケンかを売られたようなものだ。だからムカつく腹が立つ。売られたからには買う！あんな奴絶対に倒す！これはアキラにとつてケンカみたいなものだ。ただ今回は相手は人間ではなく悪魔、人知を超えた怪物、たつたそれだけ。たまたまナイフを持っていたのが悪魔だつたってだけ。人間か悪魔かだなんてそんな些細で小さなことはこの少年には関係なかつたのだ。

「くそ！大事な制服に穴あけやがつて！見てろ！アイツの鼻つ柱を絶対に碎いてやる！！」

やるからには倒す！ただそれだけを心で繰り返しながらカマイタチを巻き起こしながら追つてくる悪魔から全速力で逃げていた。

アキラとベルルがいなくなつた教室は妙に静かになつていた。アキラが教室から抜け出すと同時に物凄い旋風が起こりソレがアキラを追つて行く様に消えていったのだ。何もしない、何もすることがで

きない。見ているしかなかつたのだ。ただ一人、どんな理由事柄か知らないが自分を助け、そのせいで負つた生々しい背中の傷を見せられた少女はぼそつとつぶやいていた

「あんな傷見せられて・・・これからどうやってアイツを叱れって言つのよ・・・」

今までアキラに掛けていた言葉を思い出す。結構酷い」と言つていたのかなと・・・。

だがそんな考えはすぐに吹き飛んだ。今は「こじにいてはいけない、いたらいずれ死ぬ」少女の頭脳はもうこれしか考えられなくなつていた

## 凄くピックリッ！？（後書き）

どなたか掲示板に感想でも書いてオイテクダサイ。 お願いします。  
・  
・  
・

## なんてこゝた

一步一歩走るたびに肩から背中にかけての傷がズキッと痛み出す。だが今はそれを無視するしかない、そんな事を気にしていたら次こそ怪我じやすまない。

学校で襲われたのは少し運があるかもしない。こここの構造ならほぼ知り尽くしている、地形を把握するのは戦闘において重要だ。そのおかげかなんとか奴との距離を保つていられた

「ヒヤッハハアツツ！…逃げろ逃げろ！…面白い！…お前面白いぜツツツ！」

ベルルはカマイタチで通路をボロボロにしながらアキラを追つていった。都合がいいことに廊下に人は誰もいない。ちょうど休み時間が終わつたからか、それとも異様な気配を察して教室から出てこないか・・・

時間と体力が許す限り逃げ回る。カマイタチの余波で小さな傷は無数にあるが肩の傷以外痛くはない。奴は遊んでいるらしくあまり距離を詰めてこようとはしなかった、時間の感覚があまりないから分からぬがもう結構な時間逃げていると思う、人影も見えないし体力も減つてきた、このまま走つてたらそれだけでばててしまう。そろそろ反撃に出たい頃合だ

「丸腰じゅきつこよな・・・・・」

階段を下って一階の家庭科室に駆け込む。いろんな場所を経由したがめぼしく武器なりそうな物は見つかなかった。奴相手に効きそうな物がこの学校にあるとしたらここにしかない。

「良しこれだつー。」

壁にかけてあつたモップをバツキつとへし折り適当な包丁を手に取つて先端にくくりつける。近くにあつたガムテープやらビニールテープやらでくくり付けたため強度に少し心配があるがこの際そんな事言つてられない

奴がいつ来ても言いように入り口を見据えて即席の槍を構える。だがなんか変だ。槍を作るのに20秒はかかるはず、奴が来ていてもおかしくない時間は経過している

頼りない槍によりいつそ力を込めた。周囲を警戒し集中力を高める

「気抜いてんじゃねーゼえつつつーーー、ギャハウハハアツつーーー！」

「何つつつー？」

その瞬間横から物凄い衝撃とカマイタチが襲ってきた。

「ぐつ・・・つ！」

体が宙に浮き壁に激突した。背中と左腕にハンマーで殴られたような痛みが起ころる。この痛みはやばい、相当やばい。朦朧とする意識を何とか立ち上がらせて今起こったことを確認する。さっきまで立っていた場所のすぐ横の窓ガラスがバラバラになっている、奴が外から突撃してきたのだ。何があつてもすぐ逃げられるように窓側を陣取っていたのが仇になってしまった

「ただの半狂乱かと思つていたけど・・・以外に頭使つてやがる・・」

・

奴的には正面から突撃したんじゃ面白くないからいつたん外に出て窓から襲つてやるつて単純な考えだろう、しかしこっちにしては大誤算だ。まさか敵が退路から現れるとは考えもしなかつた。さっきまで廊下にいたと思ってたのに。良かつた事と言えば力を入れていたおかげでの衝撃を食らつても槍を手放さなかつたことぐらいか。だが左腕が麻痺してきてまともに槍を握れそうにはない。片腕じや十分にダメージを与えるか分からない

「ケケケツお前の驚いた間抜け顔面白かつたぜ！…さっきの攻撃を

食らつても倒れないとこを見ると人間にしては結構やるぜ。人間にしてはだけどな、ギャギャッハア！」

奴が近づいてくる。まずい。せめて腕の痺れが取れるまで時間を稼がないと、だが体が重くて自由に動きそうにない。やっぱりさつきのダメージが相当肉体に響いている・・・が何とか立ち上がり逃げる場所を探す

「ゲッ ヘッ へまた逃げるつもりかよ。だがもう駄目だぜっ！！お前にこの地形を把握してるから今まで血く逃げられたとか思ってないか！？チゲーよ！！俺が遊んでたから逃げられたんだよッ！！絶対的な能力の差にはそんな浅知恵通用しねーんだよ！！！ヒヤハヤヒヤハハギヤハツツツ！！！」

くそつ！！確かにその通りだ。奴が本気を出せばいつでもお前程度倒せるんだい詰められたはずだ。やられる、近づいたらやられる。距離を保たなくては切り裂かれる。

「うるせーーー！ひだつて本気出せばいつでもお前程度倒せるんだよーーー！」

心にもなこことを言つ。ひょっとでも時間を稼がないと勝機は絶対無い。

とにかく近くにある物を自由に動く右腕で手当たりしだい奴に向か

つて投げまくる。皿、鍋、胡椒、椅子、包丁……奴は避けようとせずすべてをカマイタチで切り裂いていた。包丁でさえボロボロになっている

すかさずいろんな物をブン投げる。フライパン、ポリ袋、ポリバケツ、ポリタンク、小麦粉……すべてが空中でバラバラにされた。胡椒やタンク、小麦粉を切り裂いたせいで体は濡れて胡椒と小麦粉をばっさりと被っている。

「ヒヒ、粉で俺の視界を塞ごうってか？考えたな！ホント飽きないぜお前ヒヒッ！！！と、体が汚れちまつたなあ、そうだお前の血で洗えばいいんだつ！！俺つて天才だゼエエエツエ！！ヒヒヒヒッハヤヒヤツツツ！！！」

どこに小麦粉を人の血で洗う馬鹿がいるんだよ、つと言つ暇もなくググッと首をつかまれ持ち上げられた

「ギャギャハツツ！！このまま首を切り裂けばシャワーみたいに血が飛び出すぜツ！！それにしても今日は最高の気分だぜツヒヒッ！！そりだ！！楽しませてくれたお礼に一つだけお前の望みを叶えてやるよツツー！せめてもの慈悲だヒヤヒヤ！！」

「…………うつ…………つう…………」

「早く言えよツツ！－」こつちはお前が投げた粉と水で体がぬるぬるしてて気持ち悪いんだからよツツ！－ちなみに逃がしてくれつてのはなしだぜゲヘヘゲゲヘエエ！」

「つづ・・・・・じや・・・ねえ・・・」

「アンだつて？聞こえねーよ。全然力入れてねーのにもしかして苦しいのか？ギヤハギヤハアアツツ！－ホント人間つて弱つちいぜつ！ヴえへへ」

水じゃない

「でもなんで弱いくせにこんな質の高い魂持つてんだお前？？まあいい、お前の魂を食つてどれだけ強くなるか・・・・・まずは小言うるせーナブルの野郎を食い殺すツツ！－それからゼガルの奴もバラバラにしてやる！－それを考えると笑いが・・笑いが止まらなくなるぜーーービヤハツハアハハハアアアツツ！－」

俺が投げたのは

「おいっ！何も願いがないのか？……最後の最後でシラケち  
まつたじゃねえかつつ！！もういいよ、死んじゃえよお前」

油だ・・・つ！！

「・・・・・焼き鳥になりやがれっ！このイカレ野郎ツツ！」

力を振り絞り駿足の速さで右手に隠し持っていたライターを奴の腕  
に着火させた。

「ゲエエエー！－！な、なんじゃこりやつああ－？アチイ！－熱い！  
！か、体が燃えてるつ！－こんな速さでつづ－？ギヤアアアアアツ  
ツツ！」

全身に水ではなく油を被っていた奴の体は一瞬にしてボボボボボつ

と燃え上がる

あまりに炎熱のせいか首を掴んでいた腕を離し床でのた打ち回る、炎を消そうとしているが全く消えそうにない。ただでさえ燃えやすい体毛をしているのにその体に油を染み込ませたのだ、そう簡単に収まる筈もない

やつとこさ殺される寸前で奴に反撃ができた。自由になつた首をさすりなんとか呼吸ができるようにする。全然力を込めていないと言つていたが完璧に痣になつて後が残るぞこれは。痛みを我慢して槍を拾い奴を凝視する

「余裕ブツコいて俺の投げた物避け様ともしなかつただろ？だからそつなるんだよバー！まあ俺も最初は油が入つてゐるなんて気付かなかつたけどな」

氣付いたのは首を掴まれた後だ。奴の「体がぬるぬるしてて気持ち悪い」と言つて台詞で完璧に確信した。ホント九死に一生つて感じだ、まあ家庭科室にあるタンクだからもしやとは思つていたが予想が的中したのだ。だがまだ安心はできない。形成が変わつたといつてもこつちもボロボロだ、正直立つているのも辛い。

「頼むううつつ！！消してくれ！！この炎を消してくれっ！！死んじまうっつー！死んじまうよオオオオオ・ツツ！…！」

簡単には近づかない。せつかく」にまで道を繋いできたのだと、近づいた瞬間スパッとやられたら全くシャレにならない

「お前みたいに慈悲深くないんでな、できればそのまま焼け死んでくれ」

奴から焦げ臭い黒い煙が上がる。どうやらアイツはカマイタチは起こせても単純な風や突風は起こせないらしい。炎も衰える気配がなく淡々と奴を燃やしている、あの苦しみ方は演技とは思えない。もしかしたらこのままだ見ているだけで決着がつく可能性かもしれない、そう考えると気が緩みそうになってくる

「あれえ？・・・・ねえアキラ・・なんか焦げ臭くない・・・？」

右腕から場違いな声が聞こえてきた、腕輪から顔を出し辺りを見回していくその顔はモロ寝起きって感じだ。言いたい事を必死に押さえ優しく声を掛けることにした

「おはようコースちゃんやつと起きたねえ・・今まで何回も声を掛けたのにどうして起きてくれなかつたのかなあ？」

小さい子供に話しかけるような口調で話す。しかのも名前後に「ちゃん」付けで。だがそれを無視して勝手に喋りだす

「なにあの燃えてる悪魔・・・もしかしてアキラが倒したの！？すごいじゃない！腕輪の力を使つたとはいえ魔術を使えない人間が一人で悪魔を倒すなんて早々できないわよ普通、しかも初めての戦闘で武器の用意もなしでやるなんて。やっぱり私とレットが目を付けてただけのことはあるわ」

リースは何かブツブツ言いながらウンウンと頷いている

「・・・・・」

「コイツ・・・何か物凄く勘違いしてないか？俺は腕輪の力なんて1ミリも使ってないぞ、つてか使い方がわからないし。リースの見当違いな台詞を聞いて完璧に頭にきた

「！」のつバカ野郎つつ！寝ぼけてんじゃねーぞリースつつ！お前腕輪の使い方なんて一言も俺に教えてないだろうがつつ！！だいたいなんですぐ起きねーんだよ！！おかげでこっちはもうズタズタなんだぞ！！」

家庭科室中に怒声が響き渡る、こんな近くで大声を出したんだ、たぶんリースの耳はキーンという痛みに襲われてるだろう

「…………あれ……腕輪の力……引き出し方言つてなかつた  
け……」

リースの顔が急速に青くなつていく、これは完璧に凶星だな

「ゴメン……ゴメンね……」

リースが泣きそうな顔で謝つてくる、「こればずるいーこんな可愛い顔して泣かれたらもう何も言えなくなる……だがこっちは生死がかかつてゐんだから甘くはできない

「でも人間つてやれば何でもできるのね……ホント見直しちゃつたよお、この調子ならこれから全然不安がないね」

いや、不安だらけだ。だいたい俺の体がこんなにボロボロなのを見てよくそんな事が言えるなコイツは

「もういい……だけど次何か重大なミスしたら俺にだつて考えがあるからな。だいたいお前は俺を護衛しに来たんだからしつかりしてくれよ」

「わかつた……次に何か失敗したら私のこと好きに使つていいから……」

「……好きに使つていいってどう言つ事だ？ もしかしてリースにとかピーとかしたりしてもいいって事か？ それともテレビのリモコン取つてもらつたり、ちょっとお茶淹れてもらつたり、姿が見えないことをいいことにテストのカンニングさせたりしてもOKって事なのだろうか？ 多分リースが言つているのは後者の方だろう前者のほうはあまり想像しないでおこづ……顔が赤くなる。まあどちらにしても体が小さいからあんまり役に立ちそうにない。それに全然分かつてない、次に何か大きなポ力をしたら今度こそ命が無くなっているかもしれないという事を。今回はたまたま運が良かつただけだ

「まあ今まで俺も悪魔をなめてたよ……だけど今回の件で恐ろしさを実感できた。これからは何か武器になるものを持ち歩いたほうがいいな。それとにかく今は氣を抜かないでくれ、奴は死んだわけじやない……つづて……？」

「ククク……お前の血で洗えないから自分の血で洗うこととした奴の体を包んでいる炎が見る見るうちに小さくなっている、やがてそれも消え中から傷だらけの悪魔が出てきた

「ククク……お前の血で洗えないから自分の血で洗うこととした

ぜ・・・俺は火が苦手でな・・・少しパニクつちまつたが良く考え  
れば俺様があんなチンケな炎で死ぬわけねーんだからよ」「みらう

とんでもない事に奴は自らの肉を切り刻みその血で炎を完全に鎮火させたのだ。体がいた痛しいがさつきより数倍脅威を感じる、嵐の前の静けさというのはまさにこういう感じなのだろう、さつきまでのリースとの会話の内容が凄く小さくてくだらない事に思えてきた

「リース・・・腕輪の使い方を・・・」

もはやこれしか話すことが無かつた

「わかったわ・・・まず腕輪に血を染み込ませてから一周右に腕輪を回す、それから意識を集中させて「ブレイクアップ」って心中でも口に出してもいいからとにかく叫んで。そうすれば全身に特殊なアーマーを纏える筈よ、とりあえず今人の目は無いからすぐ「変身」しても大丈夫だよ」

「ああ分かつたぜ・・・サンキュー」

腕輪にはすでに十分な血が付着している、後は右に回して叫ぶだけだ。俺は瞬間に腕輪を回し心中ではなく口に出して叫ぶ」とこした。

「ブレイクアップツー！」

## なんていひた（後書き）

ちょっと分かりづらい部分があると思いますが頑張りました。カンソウオネガイシマス・・・前回感想くれた方本当にありがとうございます。かなり嬉しかったです

## アーマー

激しい燐光と共に腕輪から伸びた無機物の触手が全身を包み込んでいく。体を包み終わるとただの無機物だつたそれは形を変え始めアーマーを形成していった。肌が露出しているところは一つもない。アーマーの外観はまるで特撮のヒーロー変身後つて感じだ、全身の色が赤と橙で構成されていて獣じみた刺々しい外殻だつた。まるで百獸の王ライオンをモチーフにしたような。

「これが腕輪の力・・・・」

熱い。体中が熱い。経験したことはないが40以上の中熱になるところな感じになるのだろう。これじゃまともに体が動きそうになり。

「おお・・・ずいぶん変わったじゃねえか人間。そんな切り札持つてやがったのか。だが足元がふらふらだぜ・・ヒヒッヤ！。つと、お互にこんな狭いところじゃやりづらくなえか？ちょっと場所を変えよっぜ！！」

「ゴリゴリ！」と奴の動きに全く反応できず腹に蹴りを食らつてしまつた。浮いた体は窓を簡単に突き破り校舎の外まで吹っ飛ばされる。受身を取れず4メートルほど転がつてようやく体を起き上がらせることができた

「へやつ……」れじやまともに動けない・・・・

だがダメージは薄い。見たところ15・6メートルは吹っ飛ばされたのに口から少し血が出ただけだ、もちろん腹は強烈に痛いがこれは凄いことだと思う。普通の状態なら確実に即死していただろうしかしおかしい。まるで全身に重りを付けらさらには鎧に縛り付けられた感覚がある。立ち上がつただけでも相当筋肉が疲労しているのが分かつた

「リース！なんか凄く熱っぽくなってきたし、体がつましく動かなくなってきたぞ・・・・」

いつの間にやら隣にいるリースに問いかける

「うーん・・・・初めての変身だから多少体温が上がるのは仕方ないけど・・・体が動かないって言つのはおかしいかも・・・」

「おこおこマジかよ・・・・」

防御力が上がつてもこれじやまともな戦いになる筈がない。奴がゆっくりと近づいてくる、まだ10メートルは距離があるが時間がないのも本当だ

「ちょっと調べてみるからじつとしててね」

すると何を思ったのかリースが額に手を当ててきて何か真剣な表情でブツブツと呟いている、それが終わつたと思うと今度は申し訳なさそうな顔でじっとみつめられた

「リースどうした？」

何か良くない事が分かつたらしいリースの気落ちした顔をみるとこれから何を言われるか不安になつてくる。もしかして重大な欠陥が腕輪にあつたのかも知れない

「・・・実はね・・・言いにくいんだけどアキラが身に着けてるアーマーを動かすには「魔力」っていうのが必要でね、ほんのちょっとの魔力があればちゃんと機能するはずなのにそのアーマーには魔力が全然供給されてないみたいで・・・もしかしたらアキラには魔力がないのかもしれないの・・・」

「その・・・魔力がないって・・・どんな人間にも多少はあるつて朝言つてなかつたか？」

朝いろいろなレクチャーを受けたときに確かに言つていた。どんな人間生物にも「魔力核」、つまり魔力を生み出すジェネレーターが必ず一個は存在していてそれは生きていく上で重要な生命エネルギーになるらしい。

「普通の人ぐらい魔力があれば機能するアーマーがちゃんと動かな  
いって事はアキラはやっぱり生み出せる魔力が極端に少ないので・  
・生きているのが不思議なくらいにね」

「せりふと囁きのなかじれつて凄こぼすことなんじやないのか？」

その時奴の必殺技はすでに完成していた

「そんなこと気にしてる暇ないぜえええ！今すぐ切り裂いてやるからよー！ヒッシュ！」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

急に辺りの風圧が強くなつてくる。それもそうだ、奴の近くにはありえない物が存在していた。

巨大な竜巻。直径十数メートルは達しているであろう。

## しかも四つ

「カマイタチだけじゃなくあんなモンまで作り出せんのかよ・・・

L

今の状態では100パーセントあの竜巻を避けられない。あんなの  
に巻きこまれたら死ぬまで切り刻まれるか上空に巻き上げられて地  
面に落下して死ぬかどちらかだろ？

「けけけ馬鹿共が！何のために場所を変えたと思つてんだよー？」「  
れを食らつてさつさとバラバラになつちまえーヒイイイヒヒヒヒ  
！」

## アーマー（後書き）

何このグタグタな展開・・・・やる気なくすわ・・・

正直ピックリ!

巨大な竜巻が砂を巻き上げ突進してくる、しかも四つ。変身を解いて身軽になれば避けられるかも知れないがいいように追い詰められて奴本体にバツサリやられるのがオチだ。

「ヒヤやせ…！死ね…！！！」

一つの竜巻が正面から迫つてくる。時速何キロ出でいるのだろうか解らないが少なくとも自動車並みのスピードは出でるようだ。

「也沒關係...？」

「くそつ！リース！お前はずつと離れてろ！」

竜巻が起こす強風によつて軽々と後方に吹つ飛んでいつたリースに叫ぶ。だがこちらも他人の心配をしてる余裕などない

ボロボロになつた体を無視して思いつきり脚に入れ横に跳ねた。

۱۰

2・3メートル飛んでギリギリ避けるはずだった、だが信じられないことに一回の跳躍で体が10メートルは横に飛んでいたしかも助走なしでだ。生身の体じゃ絶対無理な飛距離。

「す、すげえ……予想外だ……こんなに体が重いのにこんなに力が出るなんて……。これなら少しほは持ちこたえられ……」

ブツン・・・と何かが切れる嫌な音が脚から聞こえた。瞬間鋭いようでジワジワくる強烈な痛みが右脚首に広がる。確実に切れた。本来魔力がないと稼動しない物を自らの肉体の力だけで動かしたのだ、さっきの跳躍でアキレス腱に相当負担がかかつたらしくあつさり破裂してしまった。たまらず立つていられずドスツと方膝を地面に付ける

「痛つ・・・慎重に動かないと・・・」

ここまで体に負担がくると行動が制限されてくる。敵の攻撃を避けているのにダメージ負つてるとんじや本末転倒だ

「ヒヒヒヒ慎重に動かないとつて・・・ギヤギヤツギヤギヤハ！もうほんとど動けないくせになーに言つてんだよ馬鹿があ！！しかしここまで弱らせればもう頃合か・・・お前ならもう少し踏ん張ると思ったがもう立てないほど限界らしいな」

奴がパチンと指を鳴らす。すると前後左右からゅつくりと巨大な竜巻が迫つてくる。だが進行を止めて四つの竜巻は俺を中心にグルグルと高速で周囲を回り始めた。完全に取り囮まれた、まるで風の牢獄。しかも痛みと疲労ですぐには動けそうにない

「何する気だアイツは・・・」

てつくりすぐに竜巻に呑み困れると思つていた。しかし未だに竜巻

は約半径10メートル周囲を回つてゐるだけで何もしてこない

竜巻の所為で段々と砂煙が上がつてくる。しかも竜巻が四方八方回つてゐるから逃げ場がなく永遠と砂が舞い上がってどんどん視界を曇らせていく。

「ゲホッ・ゲホ・・・・！何だこりゃ。これじゃ眼を開けても砂で周りが全然見えないじゃんか・・・・・」

もう完璧に田の前すら見えなくなつてきた。まさに視界ゼロだ。かうひじて眼を開けても視界には砂しか映らないだろ？

「ギャハハハ！…何も見えないだろ…？準備は完璧だ…ぶつ殺してやるぜー————ツツツ————！」

と頭上から感極まつた奴の聞き飽きた笑い声が聞こえてきた。多分この風の牢獄に上から飛び込んできたんだろう

なるほど。奴はこの視界ゼロの空間で俺を自らの手でとことん轟り殺す氣でいるんだ

「でも見えないのはアイツも同じじゃないのかよ・・・・」

## 正直ピックリー（後書き）

もっと文章力ほしー。感想もほしー。

ヒヒヒヒ・・・せつたぜえつ・・・せつと奴を閉じ込めることがで  
あたぜつ・やつとやつとやつとなぶり口セルぜえシツツ！  
！よくも俺の体をこんなに焼け焦がしてくれたよな～つづ・・・

ボーンと空高く跳躍する。そして田らが造りだした風の牢獄の中に  
入る

「（見つけたぜえええつつつ・・・）」

クククあいつこの砂の中じゃ御互い正確な居場所がわからないから  
致命傷は避けられるとかなんとかきっと考えてるぜ・・・馬鹿な奴  
だ、もうお前の血の匂いははつきりと記憶してんだからよーーー！

背後から勢い欲近づく。竜巻が起こす音の所為で気付く様子もない

ヒヤヒヤヒヤ！…これだけ近づけばお前の姿もくつきり見えるぜえ  
つ！…人間の視力じゃむりだらうがな・・ヒヤヒヤヤ…！…

「そらよつつつ…」

ドガッと3発背後から殴る。踏ん張る力がないのが5メートルほど  
吹っ飛んだ。それを追いかけ両手を振り上げハンマーのように振り  
下ろした・・・が避けられた。地面を転がりもう少しのところで  
かわされてしまった

「へっつ！ 巧くかわすじゃねーか・・・・・つともう時間か・・・

もつと遊んでいたいがこの大火傷の体で竜巻四つ操る魔法を長い間行使するのはつらい。四つの竜巻で相手を囮む非効率な方法は本来もつと自分の体が万全の時にしかやらない竜巻の使い方だった。

「チツツ！まだ全然殴りたらねーのによー。だが殺し方は考えたぜ！頭からケツまで縦に一気に引き裂いて真つ二つにしてやるぜえええ。アジの開きみたいでおもしれーだろーー？ギャハハハー！！！」

奴を匂いで追うとすぐ見つけることができた。しかも殺してくれといわんばかりに方膝を地面に付けた状態でピクリとも動く様子がない。疾風の素早さで背後に接近して切りかかる

「くたばれえええ！――！ハヒヤヒヤツシヒヤ――！」

グサツ！・ブシュツツ！・「ボツ・・・」ボボボ・・・

血が泡立つ音と噴出す音が聞こえた。だがおかしかった。その音は外からではなく体内から聞こえた。腹を見ると太い外殻に覆われた腕が突き刺さっている。その腕は俺が今殺そうとしていた奴の腕だ・・・。どうして？俺の位置と襲ってくるタイミングがこんな正確にわかった！？しかも致命傷になる場所を振り向きざまに的確に貫けたんだ？奴はさっきの瞬間まで俺のいる場所の真逆を見ていたはず

なのに。音も聞こえない、視界もほぼゼロの中でビクンといんな……

「ヤロウ……に・人間・・・ど・・ビクンといんな……」

「…………お前の体からすげー焦げ臭い匂いがすんだよ、自分で気付かなかつたのか?」

「オ・・・俺と同じ方法で・?・・・人間の・・・クセ・・・に・・

」

「…………あまり人間をなめない方がいいぜ・・・・ 焼き鳥野郎」

「」・・の・下等生物・・・が・・・

そして腹を貫かれた巨大な鳥の怪物はその言葉を最後に音もなく地面にくずれた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0612a/>

---

自分でもビックリ！

2010年10月28日07時30分発行